

日本学術会議公開シンポジウム/ 「2017年九州北部豪雨災害と今後の対策」

において農業農村工学会として農研機構梶原室長が報告しました

平成29年7月の九州北部豪雨では、流域で発生した土石流の影響等で、ため池を含む農業水利施設の一部に大きな被害が発生しました。日本学術会議と防災学術連携体は、平成28年12月1日にシンポジウム「激甚化する台風・豪雨災害とその対策」を共同主催しました。この度は、これに続く学会連携の議論の場として、2017年九州北部豪雨災害に注目し、防災学術連携体の参加学会の発表を主とした公開シンポジウム「2017年九州北部豪雨災害と今後の対策」を平成29年12月20日に日本学術会議講堂において開催しました。この中で農業農村工学会を代表して農研機構農村工学研究部門企画管理部災害対策調整室の梶原義範室長が、「平成29年7月九州北部豪雨における農地・農業用施設の被災状況」を報告しました。

報告では、SIPによるため池リアルタイム予測技術の紹介や被災ため池の被害タイプ別の説明等が行われました。質疑応答ではため池「山の神2」の決壊時期やリアルタイムため池予測における流木の扱いなど活発な質問が多数寄せられ、他学会からも関心の大きさが明らかになりました。会場はほぼ満席で、学協会の連携が図られたシンポジウムとなりました。



報告を行う梶原室長

セッション3で梶原室長ほか2名が発表

詳しくは下記をご覧ください。

http://janet-dr.com/07_event/event00.html